

研究報告

高齢者における性のマイナスイメージおよび 恋愛行動の実態と関連性

Factors related to negative image of sex for elderly people : A cross-sectional survey

萩原仁美 宮崎文子 朝澤恭子 菊池結衣 木村舞衣
中村明莉 松崎夏美 山田由貴 加藤江里子 平出美栄子

Hitomi HAGIWARA, Fumiko MIYAZAKI, Kyoko ASAZAWA, Yui KIKUCHI, Mai KIMURA
Akari NAKAMURA, Nami MATSUZAKI, Yuki YAMADA, Eriko KATO, Mieko HIRADE



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈研究報告〉

高齢者における性のマイナスイメージおよび恋愛行動の実態と関連性

Factors related to negative image of sex for elderly people: A cross-sectional survey

萩原仁美¹ 宮崎文子² 朝澤恭子² 菊池結衣³ 木村舞衣⁴
中村明莉⁵ 松崎夏美⁴ 山田由貴⁴ 加藤江里子² 平出美栄子²

1 東京医科歯科大学医学部附属病院

2 東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部 看護学科

3 東京北医療センター

4 独立行政法人国立病院機構東京医療センター

5 東京医科大学病院

Hitomi HAGIWARA¹, Fumiko MIYAZAKI², Kyoko ASAZAWA², Yui KIKUCHI³, Mai KIMURA⁴

Akari NAKAMURA⁵, Nami MATSUZAKI⁴, Yuki YAMADA⁴, Eriko KATO², Mieko HIRADE²

1 Tokyo Medical and Dental University Hospital

2 Division of Nursing, Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

3 Tokyo North Medical Center

4 National hospital organization Tokyo medical center

5 Tokyo Medical University Hospital

要 旨：目的：高齢者における性のマイナスイメージおよび恋愛行動の実態と関連性を明らかにする。

方法：健康な65歳以上の男女464名を対象に、2016年7月～9月に無記名自記式質問紙法で量的記述的横断研究を行った。調査内容は属性、性のマイナスイメージ、恋愛行動であり、分析はt検定、一元配置分散分析、重回帰分析を用いた。

結果：240部（51.7%）の有効データを回収した。女性群は男性群より性のマイナスイメージ得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。性のマイナスイメージには仕事なし（ $p<0.001$ ）、後期高齢者（ $p<0.05$ ）が有意に正の影響を与え、恋愛行動には現在の仕事あり（ $p<0.001$ ）、恋人あり（ $p<0.01$ ）が有意に正の影響を与えていた。

結論：有職の前期高齢者は性のマイナスイメージが低く、有職の高齢者は恋愛行動が高いという特性を理解して関わる重要性が示唆された。

キーワード：高齢者 性 イメージ 求愛 行動

Keywords：Aged, sex, Self-Concept, Courtship, Sexual Behavior

I. はじめに

日本では他に類を見ない速さで高齢化が進み、2018年には人口の28.1%¹⁾、全国民の4人に1人が高齢者である。超高齢社会において、高齢者の健康の維持増進は大変重要なことである。近年、性的少数者やセク

シュアルハラスメント、未成年者の性被害等の性に関する課題が取り上げられているが、高齢者の性に関する話題は少ない。歴史的にみると、日本では儒教に基づく性道徳によって性はタブー視されてきた背景がある²⁾。また、長い間、性の解放化から取り残され、ほとんど言及されないまま「老いたら性は枯れ

る」「老人と性とは無縁の存在だ」という思い込みが続いてきた背景もある²⁾。これらのことから、社会的に高齢者の性はマイナスな側面に位置付けられているといえる。高齢者自身やその周囲の人々が性のマイナスイメージを持つことにより、高齢者にとっては性的側面において日本は生きにくい社会であると考えられる。

近年の国内の高齢者に関する研究では、高齢者を取り巻く介護の現場において、高齢者同士の恋愛や性的言動の問題が起きている³⁾と指摘されている。また、高齢者は自分自身の性に否定的であり、高齢者がもつ性的規範も考慮したケアが課題であると報告されている⁴⁾。これに対して、恋愛や好意をもつ相手とのかわり、それらの感情の表出は、QOLを保証し⁵⁾、また、性生活により生活の潤いがあったという報告もある⁶⁾。

一方、海外では、Leeらが、高齢者の性的活動の減少、性欲減退や性交渉に対するパートナーとの不一致など、性的問題を報告している⁶⁾。また、高齢者のwell-beingにおいて、男性は低いwell-beingと性機能障害が関連し、女性のwell-beingはパートナーとの活動や頻度と関連すると報告されている⁷⁾。さらに、Lindauらは、高齢者は加齢に伴い性的活動が減少し、性欲低下、性機能低下の問題を抱えていると述べている⁸⁾。これらは、高齢者の性行動に関して検討しているが、高齢者自身が性そのものへのイメージをどのように持っているかは不明瞭である。高齢者が実際に表出する、異性に対する恋愛感情から生まれる具体的な行動（以下、恋愛行動）は明らかにされていない。

高齢者の性は生きていく上で大切にされるべきであり、生きる力に結び付くものであるが、高齢者の性のイメージに関する報告は僅少である。高齢者が性に対してどのようなイメージを持ち、どのような恋愛行動をおこなっているのか現状を理解することは、援助をする看護職者にとって対象を全人的に理解する上で必要なことである。

そこで、高齢者の性の健康を理解し、ケアに活かす示唆を得るために、高齢者の性のイメージおよび恋愛行動の現状と属性との関連性を明らかにすることとした。

II. 目的

本研究の目的は、家族や看護職者が高齢者の性の健康を深く理解する示唆を得るために、高齢者の性のマイナスイメージおよび恋愛行動の現状と属性との関連性を明らかにすることである。

III. 方法

1. 研究デザイン

無記名の自己記入式調査票を用いた量的記述的横断研究である。本研究の概念枠組みを図1に示す。高齢者の性のマイナスイメージと恋愛行動の実態を明らかにし、属性との関連を検討した。

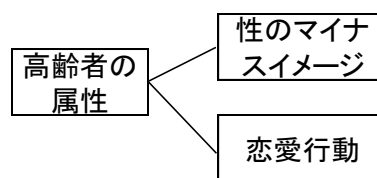


図1 本研究の概念枠組み

2. 対象者

調査対象は関東圏の自宅で日常生活を送っている健康な65歳以上の男女464名であった。組み入れ基準は自身で調査票に記入できること、独歩可能で調査票投函ができることであった。研究協力施設はシニアボランティアセンター、市民講座運営施設、茶道クラブおよびマンドリンクラブであった。サンプルサイズは17項目の因子分析を行うことと、本研究と類似した地域在住高齢者を対象とした自記式調査の郵送回収率49.4%を参考に¹⁰⁾、436名と算出した。

3. 用語の定義

性のマイナスイメージ：性は恥ずかしい、性について口にしてはいけない等の性に対する否定的な考え。

4. 調査方法

研究デザインは量的横断的記述研究であり、調査方法は研究協力施設による協力を得て、無記名自記式調査票を使用した。回収方法は個別郵送法であった。施設に所属する知人を介して施設長の同意を得たのちに、研究対象候補者に口頭と書面で直接研究協力依頼を行い、調査票を配布した。調査期間は2016年7月～2016年9月であった。

5. 調査内容

調査内容は、属性9項目、性のマイナスイメージ5項目、恋愛行動12項目、合計26項目であった。

- 1) 属性：性別、年齢、配偶者の有無、現在の恋愛の有無、現在の恋人の有無、現在の性交頻度、交流の場への参加の有無、運動の有無と頻度、現在の仕事の有無の回答を求めた。
- 2) 性のマイナスイメージ：性のマイナスイメージの調査項目は、堀口ら¹¹⁾の文献を参考に研究者

らが作成し、研究者らが内容妥当性と表面妥当性を検討した。性は不潔で汚らしい、閉経以降は性生活をやめるのが自然だ、高齢者の恋愛はない、婚前前の性交渉はよくない、性について口にしてはいけない、の5項目の回答を求めた。5項目5件法であり、5点から25点の範囲を取り、得点が高いほど性のマイナスイメージが強いことを示す。本研究で信頼性と妥当性を検討した。

- 3) 恋愛行動：恋愛行動の調査項目は、松井¹²⁾、飛田¹³⁾の文献を参考に研究者らが作成し、内容妥当性と表面妥当性を検討した。個人的な悩みをうちあける、さびしい時、話を聞いてもらう、プレゼント贈る、二人で外出する、特別な用がないのに電話をする、お互いの家へ遊びに行く、結婚してほしいと相手に求める、キスしたり抱き合ったりする、愛撫をする、性交する、相手と口げんかをする、別れたいと思ったことがある、の12項目の回答を求めた。12項目5件法であり、12点から60点の範囲をとり、得点が高いほど現在の恋愛行動が活発であることを示す。本研究で信頼性と妥当性を検討した。

6. データ分析

分析には統計ソフトSPSS Statistics 21を使用し、記述統計量を算出した。尺度の信頼性と妥当性を検討するため、因子分析と信頼性分析を行った。尺度得点を従属変数とし、性のマイナスイメージおよび恋愛行動と属性がどのように関連しているか2群比較はt検定、3群以上の比較は一元配置分散分析を行い、その後の多重比較はTukey法を用いた。性別、年齢区分、現在の恋人、現在の性交、現在の仕事の属性5項目は2群比較し、現在の恋愛は「あり」「なし」「どちらでもない」で3群比較した。また、質問に対する回答数の男女差は χ^2 検定で検討した。さらに、性のマイナスイメージおよび恋愛行動を従属変数、対象者の属性を独立変数と設定し、ステップワイズ法を用いた重回帰分析で関連要因を検討した。有意水準は5%とした。

7. 倫理的配慮

本研究は、東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認（承認番号28-7）を得て行った。研究協力は任意であり協力をしなかった場合に不利益は生じないこと、結果を公表すること、プライバシーを保護すること、データはパスワードをかけること、データは一定の期間保存すること等を、文書を用いて研究協力の了承を得た。調査票は無記名で個人が特定できないように個別郵送法で回収し、調査票の回収をもって調査協力への同意とみなした。

IV. 結果

調査票の配布部数464部、回収部数305部、回収率65.7%であった。属性以外の尺度に欠損値のあるデータは除外した。有効回答部数は男性105名（43.8%）、女性135名（56.2%）、計240部であり、有効回答率51.7%であった。

1. 属性（表1）

対象者の属性を表1に示した。性別は男性が105名（43.8%）であり、年齢区分は前期高齢者142名（59.0%）であった。配偶者が「いる」と回答した人は169名（70.4%）であり、現在「恋愛中である」と回答した人は30名（12.5%）、現在「恋人がいる」と回答した人は24名（10.0%）であった。現在の性交頻度は、年1回以上19名（7.9%）が最多であった。交流の場への参加が「ある」と回答した人は138名（57.5%）、運動ありと回答した人は158名（65.9%）であった。運動ありと回答した人のうち、運動頻度は「週2～3回」と回答した人が73名（46.3

表1 対象者の属性（N=240）

項目	n	%
性別	男性	105 43.8
	女性	135 56.2
年齢	65-74歳 (前期高齢者)	142 59.0
	75歳以上 (後期高齢者)	98 41.0
配偶者	あり	169 70.4
	なし	71 29.6
現在の恋愛	あり	30 12.5
	なし	173 72.1
	どちらでもない	28 11.7
	無回答	9 3.7
現在の恋人	あり	24 10.0
	なし	214 89.2
	無回答	2 0.8
	なし	194 80.8
現在の性交	週1回以上	3 1.3
	月1回以上	17 7.1
	年1回以上	19 7.9
	無回答	7 2.9
	あり	138 57.5
交流の場	なし	100 41.7
	無回答	2 0.8
	あり	158 65.9
運動	なし	80 33.3
	無回答	2 0.8
	毎日	48 30.4
運動頻度 (n=158)	週2.3回	73 46.3
	週1回	28 17.7
	2週間に1回	5 3.2
	月に1回	2 1.2
	無回答	2 1.2
	あり	61 25.4
	なし	178 74.2
現在の仕事	無回答	1 0.4
	あり	61 25.4

表2 尺度の信頼性と妥当性 (N=240)

尺度	N	Mean	SD	項目数	因子負荷量	寄与率	Cronbach's α
性のマイナスイメージ	240	11.5	3.2	5	0.58-0.78	45.1%	0.79
恋愛行動	240	31.4	8.9	12	0.30-0.99	59.6%	0.89
求愛行動	240	8.7	3.9	4	0.30-0.99		0.89
親密行動	240	17.5	5.0	6	0.39-0.96		0.86
葛藤行動	240	5.2	1.8	2	0.68-0.84		0.68

%)で最多であった。現在の有職者は、61名(25.4%)であった。

2. 尺度の信頼性と妥当性の検討(表2)

性のマイナスイメージおよび恋愛行動の2尺度の信頼性と妥当性検討した(表2)。性のマイナスイメージの原盤5項目を用いて因子分析(最尤法)を行ったところ、5項目で共通性はすべて0.4以上あり、因子負荷量は0.6以上であり、寄与率は45.1%であった。Cronbach's α は尺度全体で0.79であった。性のマイナスイメージは一定の信頼性と妥当性が確認され、原盤通り5項目を採択した。

次に、恋愛行動の原盤12項目に対して因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行ったところ、12項目で共通性はすべて0.4以上あり、因子負荷量は0.3以上であり、寄与率は59.6%であった。Cronbach's α は尺度全体で0.89であった。尺度は3因子12項目であり、下位尺度を求愛行動、親密行動、葛藤行動と命名した。Cronbach's α は求愛行動が $\alpha=0.89$ 、親密行動が $\alpha=0.86$ 、葛藤行動が $\alpha=0.68$ であり、葛藤行動のみ0.7未満であったが、研究者らの判断で許容範囲とみなした。因子負荷量は

求愛行動のうち1項目が0.3であったが、研究者らの判断で必要な項目であると考え、除外しないこととした。したがって、原盤通り12項目を採択した。

3. 高齢者における性のマイナスイメージおよび恋愛行動の実態(表3, 表4)

対象者における性のマイナスイメージの現状は、項目別・男女別にみると、「思う」群が多いものから、「婚姻前の性交渉はよくない」22.5%、「閉経以降は性生活をやめるのが自然だ」15.4%であった(表3)。高齢者の性のマイナスイメージの総得点平均値は 11.5 ± 3.2 であった。男性は女性より、婚姻前の性交渉はよくないと回答した人が多く($\chi^2=10.2$, $p<0.05$)、女性は男性より、性是不潔で汚らわしいと回答した人が多かった($\chi^2=9.7$, $p<0.05$)。

対象者における恋愛行動の現状の結果は、項目別・男女別にみると、「あり」群が多いものから「二人で外出する」52.9%、「さびしい時、話を聞いてもらう」45.0%、「プレゼントを贈る」36.3%であった(表4)。恋愛行動得点の総得点平均値は 31.4 ± 8.9 であった。また、男性は女性よりも性交が

表3 対象者における性のマイナスイメージ (N=240)

項目		全数		男性(n=105)		女性(n=135)			
		Mean±SD		Mean±SD		Mean±SD			
性のマイナスイメージの総得点		11.5±3.2		10.8±3.3		12.0±3.1			
		n	%	n	%	n	%	χ ² 値	p値
婚姻前の性交渉は よくない	思う	54	22.5	19	18.1	35	26.0	10.2	p<0.05
	どちらともいえない	92	38.3	37	35.2	55	40.7		
	思わない	94	39.2	49	46.7	45	33.3		
閉経以降は性生活を やめるのが自然だ	思う	37	15.4	12	11.4	25	18.5	3.6	p=0.46
	どちらともいえない	53	22.1	25	23.8	28	20.8		
	思わない	150	62.5	68	64.8	82	60.7		
性について口にしていけない	思う	22	9.2	11	10.5	11	8.1	6.2	p=0.19
	どちらともいえない	65	27.1	21	20.0	44	32.6		
	思わない	153	63.7	73	69.5	80	59.3		
高齢者の恋愛はない	思う	10	4.2	2	1.9	8	5.9	3.8	p=0.29
	どちらともいえない	49	20.4	17	16.2	32	23.7		
	思わない	181	75.4	86	81.9	95	70.4		
性は不潔で汚らしい	思う	4	1.7	0	0.0	4	3.0	9.7	p<0.05
	どちらともいえない	48	20.0	15	14.3	33	24.4		
	思わない	188	78.3	90	85.7	98	72.6		

表4 対象者における恋愛行動 (N=240)

項目		全数		男性 (n=105)		女性 (n=135)					
		Mean±SD		Mean±SD		Mean±SD					
恋愛行動の総得点		31.4±8.9		32.3±8.3		30.7±9.2					
		n	%	n	%	n	%	χ ² 値	p値		
親密行動	二人で外出する	あり	127	52.9	61	58.1	66	48.9	3.4	p=0.50	
		どちらともいえない	47	19.6	17	16.2	30	22.2			
		なし	66	27.5	27	25.7	39	28.9			
	さびしい時、話を聞いてもらう	あり	108	45.0	47	44.7	61	45.2	3.0	p=0.56	
		どちらともいえない	73	30.4	28	26.7	45	33.3			
		なし	59	24.6	30	28.6	29	21.5			
	プレゼントを贈る	あり	87	36.3	46	43.8	41	30.4	6.0	p=0.20	
		どちらともいえない	67	27.9	29	27.6	38	28.1			
		なし	86	35.8	30	28.6	56	41.5			
	個人的な悩みをうちあける	あり	77	32.1	36	34.3	41	30.4	2.1	p=0.71	
		どちらともいえない	81	33.7	32	30.5	49	36.3			
		なし	82	34.2	37	35.2	45	33.3			
	特別な用がないのに電話する	あり	62	25.8	27	25.7	35	25.9	2.0	p=0.73	
		どちらともいえない	63	26.3	28	26.7	35	25.9			
		なし	115	47.9	50	47.6	65	48.2			
	お互いの家へ遊びに行く	あり	61	25.4	27	25.7	34	25.2	5.8	p=0.22	
		どちらともいえない	64	26.7	27	25.7	37	27.4			
		なし	115	47.9	51	48.6	64	47.4			
	求愛行動	キスしたり、抱き合ったりする	あり	53	22.1	23	21.9	30	22.2	6.0	p=0.20
			どちらともいえない	55	22.9	29	27.6	26	19.3		
			なし	132	55.0	53	50.5	79	58.5		
愛撫をする		あり	41	17.1	21	20.0	20	14.8	8.7	p=0.07	
		どちらともいえない	52	21.7	24	22.9	28	20.7			
		なし	147	61.2	60	57.1	87	64.5			
性交をする		あり	33	13.8	17	16.2	16	11.9	10.0	p<0.05	
		どちらともいえない	51	21.2	26	24.8	25	18.5			
		なし	156	65.0	62	59.0	94	69.6			
結婚してほしいと相手に求める	あり	14	5.8	9	8.6	5	3.7	11.4	p<0.05		
	どちらともいえない	73	30.4	30	28.6	43	31.9				
	なし	153	63.8	66	62.8	87	64.4				
葛藤行動	相手と口げんかをすることがある	あり	62	25.9	31	29.5	31	23.0	5.9	p=0.21	
		どちらともいえない	62	25.8	26	24.8	36	26.7			
		なし	116	48.3	48	45.7	68	50.3			
	別れたいと思ったことがある	あり	30	12.5	11	10.5	19	14.1	12.5	p<0.05	
		どちらともいえない	109	45.4	41	39.0	68	50.4			
		なし	101	42.1	53	50.5	48	35.5			

多く ($\chi^2=10.0$, $p<0.05$)、求婚も多いと回答した ($\chi^2=11.4$, $p<0.05$)。女性は男性よりも、相手と別れたいと思ったことがあると回答した人が多かった ($\chi^2=12.5$, $p<0.05$)。

4. 高齢者における属性と性のマイナスイメージおよび恋愛行動の関連性 (表5～表7)

対象者の属性と性のマイナスイメージおよび恋愛行動の関連性について表5に示した。女性群は男性群より性のマイナスイメージ得点が有意に高く ($t=2.7$, $p<0.01$)、後期高齢者群は、前期高齢者群より性のマイナスイメージ得点が有意に高かった。 ($t=4.8$, $p<0.001$)。

現在恋愛あり群、なし群、どちらでもない群の3群で比較したところ、群間に有意差があり

($F=5.0$, $p<0.01$)、現在恋愛なし群は、あり群より性のマイナスイメージ得点が有意に高かった ($p<0.05$)。加えて、現在恋人なし群は、あり群より性のマイナスイメージ得点が有意に高かった ($t=3.5$, $p<0.001$)。さらに、現在性交なし群は、性交あり群より性のマイナスイメージ得点が有意に高かった ($t=4.1$, $p<0.001$)。現在仕事あり群、なし群の2群で比較したところ、現在仕事なし群は、あり群より性のマイナスイメージ得点が有意に高かった ($t=3.9$, $p<0.001$)。

同様に、対象者の属性と恋愛行動の関連性では、後期高齢者群より前期高齢者群の恋愛行動得点が有意に高かった ($t=2.5$, $p<0.05$)。現在恋人あり群は、なし群より恋愛行動得点が有意に高く ($t=3.1$,

表5 対象者の属性と性のマイナスイメージおよび恋愛行動の関連 (N = 240)

項目		n	%	性の マイナスイメージ	恋愛行動
				Mean±SD	Mean±SD
性別	男性	105	43.8	t=2.7** 10.8±3.3	t=1.4 32.3±8.3
	女性	135	56.2	12±3.1**	30.7±9.2
年齢	65-74歳 (前期高齢者)	142	59.0	t=4.8*** 10.7±3.0	t=2.5* 32.6±9.0
	75歳以上 (後期高齢者)	98	41.0	12.6±3.3***	29.7±8.4*
現在の恋愛	あり	30	12.5	F=5.0** 10.2±3.1	F=2.7 34.6±7.1
	なし	173	72.1	11.9±3.2*	30.8±8.9
	どちらでもない	28	11.7	10.5±2.9	32.5±9.2
	無回答	9	3.7		
現在の恋人	あり	24	10.0	t=3.5*** 9.3±2.9	t=3.1** 36.7±7.4
	なし	214	89.2	11.7±3.2***	30.9±8.8**
	無回答	2	0.8		
現在の性交	あり	39	19.2	t=4.1*** 9.9±2.2	t=2.7** 34.9±8.7
	なし	194	80.8	11.7±3.4***	30.7±8.8**
現在の仕事	あり	61	25.4	t=3.9*** 10.1±2.9	t=3.2** 34.5±7.9
	なし	178	74.2	11.9±3.2***	30.4±8.9**
	無回答	1	0.4		

2群比較はt検定、3群以上の比較は一元配置分散分析を行った。 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

p<0.01)、現在性交あり群は、性交なし群より恋愛行動得点が有意に高かった (t=2.7, p<0.01)。また、現在仕事あり群は、なし群より恋愛行動得点が有意に高かった (t=3.2, p<0.01)。

さらに、性のマイナスイメージおよび恋愛行動の関連要因を探索するために、各尺度得点を従属変数とし、属性9項目を独立変数に設定し、重回帰分析を行った。その結果、性のマイナスイメージには現在の仕事なし ($\beta = 0.28$, p<0.001)、前期高齢者 ($\beta = 0.16$, p<0.001) が有意に正の影響を与えていることが明らかになった (表6)。また、恋愛行動には現在の仕事あり ($\beta = 0.29$, p<0.001)、恋人あり ($\beta = 0.19$, p<0.001) が有意に正の影響を与えていることが明らかになった (表7)。

表6 性のマイナスイメージの関連要因 (N=240)

要因	β	p
現在の仕事なし	0.28	p<0.001
後期高齢者	0.16	p<0.05
R ²	0.11	
F	13.3	p<0.001
重回帰分析		

表7 恋愛行動の関連要因 (N=240)

要因	β	p
仕事あり	0.29	p<0.001
恋人あり	0.18	p<0.01
R ²	0.13	
F	16.9	p<0.001
重回帰分析		

V. 考察

1. 高齢者における性のマイナスイメージおよび恋愛行動の関連性

性のマイナスイメージは、現在の仕事がないことと、後期高齢者であることが関連していた。さらに、属性別でみたところ、女性、恋愛中でないこと、恋人がおらず、性交渉がないこと、仕事がないことも性のマイナスイメージが低いことに影響していた。有職の前期高齢者は性のマイナスイメージが低く、有職の高齢者は恋愛行動が高いといえる。後期高齢者は、1947年に教育基本法が制定され、教育上男女の共学は初めて認められた¹⁴⁾ ため、本研究における対象者の育った教育環境が影響していると推測される。この時代背景から、現在の前期・後

期高齢者間で性に対するイメージの違いがみられるのではないかと考えられる。

性のマイナスイメージは性差があり、女性の方がよりマイナスイメージを持つことが明らかになった。女性は加齢とともに性的欲求が減退し、精神的愛情を大事にする¹⁵⁾。このように保守的な傾向があることが性差につながったと考えられる。また、高齢者女性は閉経を境に女性ホルモンが減少し、膣粘膜の皮薄化などにより、性交渉のある女性のうち過半数が性交痛を感じている¹⁶⁾。閉経以降に女性が性生活から遠ざかるのは「性行為＝セックス」だからという側面が強い²⁾と言われている。そのため、女性は男性に比べて性のマイナスイメージが強くなるのが考えられる。さらに、男女交際において女性は好きな相手と良い人間関係を持つことを求め、性行為は結果としてこれに伴うものと認識しているが、男性は性行為が目的で、これを達成するための手段として男女の親しい人間関係を考える²⁾。性のイメージや恋愛行動に男女差がみられるのは、男女の性に対する考え方の相違が起因していると推測される。

恋愛行動は、現在の仕事があることと、恋人がいることが関連していた。また、属性別では、前期高齢者、現在、性交渉があること、仕事があることも恋愛行動の高さに影響していた。後期高齢者が前期高齢者より恋愛行動が現れにくい要因として、後期高齢者は特に加齢に伴う身体機能の低下が考えられる。さらに、性をタブー視する封建的な道徳の下で育った高齢者は、自身の年齢でキスや性交をすることは恥ずかしいことであると認識しているのではないかと考えられる。荒木は、性に関する保守的な考え方は年代が若くなるほど薄れている、と述べており¹⁷⁾、本研究の結果の性の保守的な考えと年代の関係も同様であるといえる。

今回の調査から、男性は女性より、前期高齢者は後期高齢者より性に対して活発であることが明らかになった。高齢者のうち男女ともに交際相手のいるほうが性に対して肯定的¹⁸⁾という報告と一部が同様の結果である。高齢者の性は、生活の質を維持・向上という点からも非常に重要な部分を占めると考える。老年期の性欲は青年期と違い、精神的な要素が強くなってくる²⁾。そのため、看護師などの医療・福祉にかかわるもの、そして高齢者を取り巻く家族は、高齢者の性的言動に遭遇した場合には、その行動の意味を理解して対応を考えていく必要があると考える。

2. 本研究の限界と今後の課題

本研究で独自に作成した恋愛行動尺度12項目の因子分析の結果、下位尺度の恋愛行動のうち1項目の因子負荷量が0.3とやや低めであり、恋愛行動尺度の下位尺度である葛藤行動の信頼性係数が0.68とやや低めであった。研究者らの判断で許容範囲とみなした。また、性のマイナスイメージ尺度および恋愛行動尺度は構成概念妥当性を確認しているものの、併存妥当性の確認は行っていない。今後はさらなる分析を積み重ね、尺度の精錬が必要である。さらに、本研究では主に関東圏の対象者に調査したが、今後は地域性を考慮した調査を行う必要がある。

VI. 結論

高齢者において性のマイナスイメージを持つ人は1.7～22.5%と少なく、恋愛行動は5.8～52.9%の人が活発であった。高齢者において性のマイナスイメージを持つ人は高齢者において女性群は男性群より性のマイナスイメージが有意に高かった。また、後期高齢者群は前期高齢者群より性のマイナスイメージが有意に高かった。前期高齢者群は後期高齢者群より恋愛行動が有意に高かった。前期高齢者のうち男性は、性のマイナスイメージが低く、恋愛行動が高いという高齢者の特性を深く理解して関わることの重要性が示唆された。有職の前期高齢者は性のマイナスイメージが低く、有職の高齢者は恋愛行動が高いという特性を理解して関わる重要性が示唆された。

謝辞

本研究の調査にご協力頂いた対象者の皆様に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 厚生統計協会編. 国民衛生の動向2018/2019. 東京：一般財団法人厚生統計協会 2019; 47-55.
- 2) 大川一郎. 高齢者のこころとからだ事典. 東京：中央法規出版株式会社 2014; 488-511.
- 3) 吉田輝美. 介護労働者の労働環境支援についての一考察 施設ケアハラスメントの現状を踏まえて. 仙台白百合女子大学紀要, 2009; 13号, 91-106.
- 4) 谷田恵美子. 「高齢者の性知識」と看護－前期・後期高齢者の認識比較－. 吉備国際大学保健科学部紀要 2007; 12: 1-10.

- 5) 香ノ木彩香, 熊谷春美, 竹中彩他. 介護職員が認識する高齢者の恋愛感情の特性をふまえた援助に求められる視点に関する研究. *人間関係学研究* 2012; 18 (1) : 11-20.
- 6) 安本亮二, 河野学, 坂本信宜他. AgingCoupleの性生活の実態. *泌尿器科紀要* 2005; 51 (9) : 595-598.
- 7) Lee DM, Nazroo J, O'Connor DB, Blake M, Pendleton N. Sexual Health and Well-being Among Older Men and Women in England: Findings from the English Longitudinal Study of Ageing. *Archives of Sexual Behavior* 2016; 45 (1) : 133-144.
- 8) Lee DM, Vanhoutte B, Nazroo J, Pendleton N. Sexual Health and Positive Subjective Well-Being in Partnered Older Men and Women. *The Journal of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences* 2016; 71 (4) : 698-710.
- 9) Lindau ST, Schumm LP, Laumann EO, Levinson W, O'Muircheartaigh CA, Waite LJ. A study of sexuality and health among older adults in the United States. *The New England Journal of Medicine* 2007; 357 (8) : 762-774.
- 10) 平井寛, 近藤克則, 尾島俊之, 村田千代栄. 地域在住高齢者の要介護認定のリスク要因の検討. *日本公衆衛生雑誌* 2009; 56 (8) : 501-512.
- 11) 堀口貞夫, 荒木乳根子, 石田雅巳, 大川玲子, 金子和子, 堀口雅子. 現在の中高年の性に関する認識と規範意識. *日本性科学会雑誌* 2013; 31 (1) : 37-44.
- 12) 松井豊. 恋愛行動の段階と恋愛意識. *心理学研究* 1993; 64 (5) : 335-342.
- 13) 飛田操. 青年期の恋愛行動の進展について. *福島大学教育学部論集教育・心理部門* 1991; 50: 43-53.
- 14) 小稲絵梨奈. 日本における男女共学論の歴史と背景小泉郁子の思想. *武庫川女子大学教育学研究論集* 2012; 7: 167-174.
- 15) 荒木乳根子, 石田雅巳, 大川一郎, 大川玲子, 金子和子, 早乙女智子他. 中高年の性的欲求の性差に関連する諸要因. *日本性科学会雑誌* 2001; 19 (1) : 22-30.
- 16) 荒木乳根子. 中高年単身者のセクシュアリティ 男女別・年代別にみた全調査内容. *日本性科学会雑誌* 2005; 23: 6-32.
- 17) 荒木乳根子. AgingCoupleの性. *泌尿器科紀要* 2005; 51 (9) : 591-594.
- 18) 金子和子. 中高年単身者のセクシュアリティ 交際している人の有無による性意識の差. *日本性科学会雑誌* 2005; 23, 43-55.